

20240221 「気候変動」ではもはやない、「気候危機」だ。

「この暑さは何だ！」「日射しが痛い！」

かつて1年中で最も寒い月と言われた2月に「夏日」が訪れました。昨日（2／20）、群馬県高崎市では25.7度、東京でも23.7度を記録しました。鹿児島では、2週間も早く梅が満開を迎えたと今朝のニュースが報じていました。2週間といえば半月（！）です。史上初を塗り替え続けるこの気候変動は、もはや「気候危機」という状態です。気候変動は、私たちが思っているよりはるかに早く進み、はっきりと実感できる状態がすでに常態化し始めています。

「問題は表面化したときはすでに手遅れ」とよく聞きます。私たちの教育の世界でいうなら、学級の問題などは正にそうですね。問題は芽のうちに「早期発見」「早期対応」と先輩先生から何度もご指導をいただきました。そして、「個だけの対応では効果が薄い、チーム、皆で気持ちをそろえて同じ歩調で対応」と組織的対応の大切さも教えてもらってきました。

しかし、この気候変動の問題はどうでしょう。地球規模ですから桁は相当違いますが、「早期発見」「早期対応」、そして「組織的にチームで！」の原理は変わらないのではないのでしょうか。でも進まない。

2019年9月の気候変動に関する政府間パネルで、国連のグテーレス事務総長は「気候変動はもはや気候危機である」と発信しました。「気候危機」がもたらすものは、単に冬が暖かいとか夏が異常に暑いという単純なことだけではないです。それが原因になって起こる「洪水」「熱波」「干ばつ」「森林火災」「巨大台風」「海面上昇」・・・そして、食料システムの崩壊が、私たちの生活を根本から脅かします。そして、もう戻りません。危機は一過性ではなく、永続性をもって私たちを脅かし続けます。

この気候危機によって、不足する資源を巡っての争いが起きることは避けられないでしょう。その最たるもののひとつは私たちが日々捨てまくっている「食料」です。ある年、突然作物が実らなかった、それだけでもうこの国は危険です。食料を緊急輸入して、ようやく手に入れても、値段が数倍になってしまっ

たら暴動ものです。実際、アルゼンチンがそうになっています。そして、次の年に豊作が来る保証はどこにもないのが「気候危機」です。

住む場所を追われることになると予想される「気候難民」は、今後数十年の間に8～30億人ともいわれます。その中に将来日本人が含まれない保証はどこにもありません。「気候危機」により飢餓の危険性が最も高くなることが予想される地域のひとつが私たちの日本なのです。ただでさえ低い食物自給率なのに、それを支える農薬も、化学肥料も、工作機械を動かす燃料も、種子をも全て海外依存です。国際関係の悪化はこの国を根底から脅かします。

「気候危機」によって私たちが真っ先に失うものは「平和」です。「生き残るために」助け合うのではなく、奪い合う、そんな世界にははいけません。

日本では、長崎県壱岐市が2019年9月に「気候非常事態宣言」をし、神奈川県鎌倉市がそれに続きました。日本初のこの宣言は、「2050年までにCO2排出量を実質的にゼロにする」などの野心的な目標を掲げています。壱岐市は、内閣府の「SDGs未来都市」にも県内で唯一選ばれています。小平第五小学校も学校として具体的な取組の柱をもっていいと思います。危機を学び冷静に未来を考えること、具体的にエコをすすめること、人と繋がり協力し助け合って取り組んでいくことをさらに学校としてすすめてまいりましょう